

## CALL教材を利用した英語授業の教育効果と学習者の反応

河内山 有 佐

### 1. はじめに

和洋女子大学にCALL (Computer Assisted Language Learning) システムが導入されて2年半が経過した。導入当初から、外国語教育研究センターを中心に英語授業で積極的にCALL教材を使い、教育方法改善の試みを続けてきた。授業数や担当教員数においてもCALLを利用した英語教育は徐々に拡充し、平成18年度には、CALL教材がリスニング授業の準主力としての位置を占めつつある。本研究は、このような状況を踏まえて、CALL教材を利用して行った英語授業の教育効果を様々な側面から分析し、今後の展望を考察する。

本学では平成17年度まで、必修科目として、1年生の教養英語を、リーディング中心とした「英語a」と、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティングを総合した「英語b」とに区分していた<sup>1)</sup>。これらの教養英語の教育効果を促進するためにいくつかの取り組みがなされたが、その一つとして、平成16年度に、英語標準テストによる英語aと英語bの習熟度別クラス分けの実施が開始され、人文学部は4学科合同で5レベルに、家政学部は服飾造形学科、健康栄養学科、生活環境学科でそれぞれ3レベルに分けられている。また、同年度にCALLシステムが導入されると、外国語教育研究センター所属の教員を中心に、英語aの1クラスと英語bの4クラスの英語授業で意欲的にCALL教材を取り入れた。当初は、いずれの授業担当者もCALLの利用経験がなく、試験的な取り組みであったが、平成17年度にはCALL教材を利用するクラスが、英語aで2クラス、英語bで15クラスにまで拡大し、この間に、授業の方法や内容についても質的改善を遂げた。

こうしたCALL教材活用法の取り組みが、実際、教育効果として表れるかどうかを探るため、本研究では、まず、CALL教材を使用しているクラスと使用していないクラスの学習者のリスニング力の伸びを、英語標準テストの結果を通して比較分析し、次に、CALL教材使用クラスの学習者による、英語標準テストにおける技能別の成績の伸びを調査する。また、

CALL教材使用クラスの受講者アンケートによる学習者の反応を検討し、CALL教材を導入した英語授業の成果や課題を考察する。

## 2. 調査のデザイン

### 2.1 調査の目的

英語標準テストによる事前テスト、事後テストを利用し、まず、英語bのクラスで、CALL使用の教授方式がそうでない方式に比べ、標準テストのリスニングセクションにおける得点の向上に違いをもたらすか否かを探る。次に、英語aとbのCALL使用クラスによる英語標準テストのセクション別の伸びを分析する。また、CALL教材使用の授業方法に対する学習者の反応を見る。

### 2.2 調査方法

平成17年度の4月、前期の最初に習熟度別クラス分けのために実施したプレイスメントテストを事前テストとし、2月、後期終了後に実施したテストを事後テストとした。テストには、リーディング、リスニング、グラマーの3セクションで構成されるG-TELP<sup>2</sup>という英語標準テストを使用した。なお、事前テスト、事後テストともに、G-TELPの同一レベル（レベル4）のテストを使用した。事前テストの内容を学生が覚えている可能性を考慮し、異なる内容のテスト問題を採用した。また、事後テスト実施後に、CALL使用クラスの受講者に授業についてのアンケートを実施した。

### 2.3 対象クラス

CALL使用クラス：英語a 2クラス（受講者計54名；授業担当者各1名）

英語b 15クラス（受講者計370名；授業担当者各1名）

CALL不使用クラス：英語b 5クラス（受講者計146名；授業担当者各1名）

### 2.4 授業の方法

教材として、アルク社の英語学習システム「ALC NetAcademy」を使用した。これはLAN環境を活用したネットワーク型のCALL教材で、登録された学生がネットワークに接続すれば、いつでも、学内のどこからでも活用できるシステムである。教材の内容は2コースあり、そのうちの1つは『スタンダードコース』で、50ユニットの「リスニング力強化コース」

と50ユニットの「リーディング力強化コース」というそれぞれ難易度が5段階で示されたコースと、「TOEIC演習コース」10セットから構成されている。このコースには、最初に語彙力とリスニング力診断テストがあり、学習者は『スタンダードコース』を学習する際に自分のレベルを確認し、そのレベルに合った教材を選択することができる。もう1つのコースは『初級・中級コース』で、「リスニング力強化コース」と「リーディング力強化コース」というそれぞれ20ユニットの難易度が異なる教材で構成されており、さらに10セットの「TOEIC演習コース」というTOEIC試験に準拠した教材と7パートの「TOEICパート演習」というTOEIC試験で出題される各パート毎の教材から構成されている。「リスニング力強化コース」では、ユニット毎にFirst Listening、確認テスト、Discovery、Speed Listening、Reviewの5段階のタスクが用意されていて、Speed Listeningでは学生が速度を変化させ耳を英語に慣れる訓練をすることができる。また、Discovery以降の段階では、印刷可能な英語表示と日本語訳があり、単語の解説も表示され、各自単語帳を作成することも可能である。「リーディング力強化コース」は、やはり5段階のタスクから構成されていて、速読に慣れることを目的としたタスクが用意されている。First Readingでは、提示された英文文章を読了し時間を測るようになっており、その後、文章をチャンクごと、一行ごと、というように読解を深める。最後に読解の速度を測り、最初と比較することができる。ここでも印刷可能な英語表示と日本語訳、単語の解説、単語帳の機能が備わっている。教材の題材としては、日本の文化、事情といった日本の紹介、寮生活、食生活など欧米文化の紹介、電話での応答、ビジネス文書といったビジネス英語、その他、米大統領の演説、ユニセフに関する事など、多様な内容が用意されている<sup>3</sup>。

授業形態に関しては担当教員によって異なり、教員によっては、解説説明、講義、発表、小テストといった授業とともにALC教材の自習を取り入れるという形式をとったり、また、ALC教材の自習を授業の前半または後半で取り入れ、残りの時間は、それとは全く別の紙の教材を使った授業を行うという場合もあった。また、本学では平成16年度にPC@LLソフト・レコーダーという、発音練習、スピーキング練習を目的としたソフトを導入したため、教員によっては、ALC教材と組み合わせてPC@LLを使用する場合もあった。その他に、インターネット上の素材をALC教材と組み合わせて利用する教員もいた。また、学生は、授業以外でも、学内の全てのコンピューターで空き時間に自由にALC教材を使用することが可能となっている。

## 2.5 調査項目

- (1) 英語bのクラスで事前テストと比較して、事後テストのリスニングセクションの得点

に向上が見られるか。CALL使用クラスと不使用クラスでは、得点の向上に違いが見られるか。

- (2) 英語 a、b のCALL使用クラスでは、事前テストと比較して事後テストのどのセクション（文法、リーディング、リスニング）で得点の向上が見られるか、または見られないか。テストの総合得点（トータル）の場合はどうか。
- (3) CALL使用による英語授業に対する学習者の反応はどうか。どの点が高く評価され、どの点が低く評価されているか。

### 3. 調査結果(1)：英語 b CALL使用クラスと不使用クラスとの比較

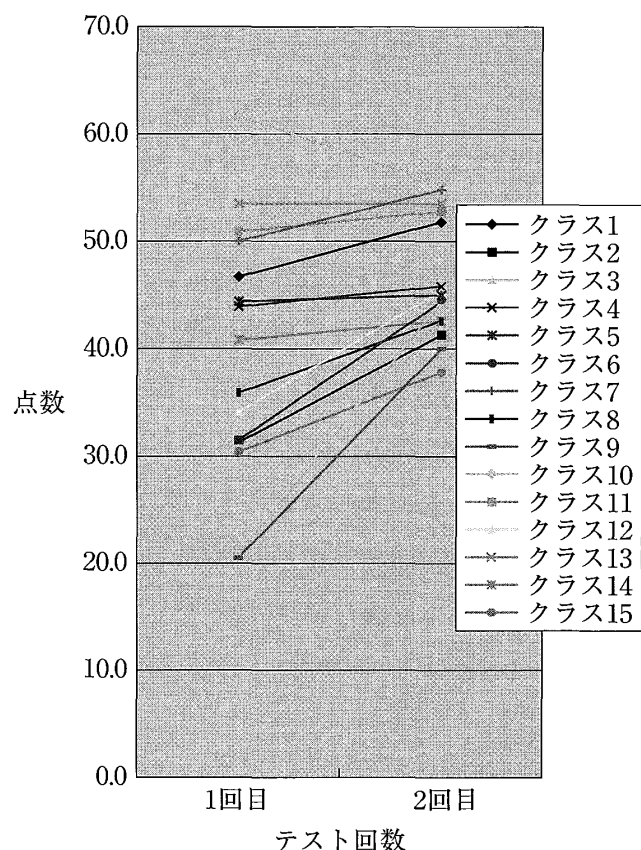
#### 3.1 TOTALの得点

英語 b のCALL使用クラスとCALL不使用クラスに関して、事前テストにおけるリスニングセクションの得点結果と事後テストの結果とを比較した。英語 b CALL使用全15クラスの

表3.1 英語 b リスニングセクション  
平均点 (CALL使用)

クラス	1 回目	2 回目	得点の伸び
クラス 1	46.7	51.8	5.1
クラス 2	31.5	41.3	9.9
クラス 3	21.0	44.4	23.4
クラス 4	43.9	45.8	1.9
クラス 5	44.4	45.0	0.6
クラス 6	31.3	44.4	13.1
クラス 7	50.0	54.8	4.8
クラス 8	35.9	42.6	6.7
クラス 9	20.5	40.0	19.5
クラス10	61.7	55.3	-6.4
クラス11	50.9	52.8	1.8
クラス12	34.1	45.4	11.2
クラス13	53.5	53.5	0.0
クラス14	40.8	42.5	1.7
クラス15	30.4	37.8	7.4
平均	39.8	46.5	6.7

図3.1 英語 b G-TELPリスニング平均点  
(CALL使用)



平均得点の伸びを見ると（表3. 1、図3. 1 参照）、大幅な向上が見られた（得点差の平均値 = +6.7点）。

これらの得点差に関して、対応のあるt検定を行ったところ（表3. 2 参照）、有意な得点の向上が認められた（ $p = 0.0024$ 、 $p < 0.05$ ）。

表3. 2 英語 b G-TELPリスニング平均点（CALL使用）

テスト回数	データ数	平均値	分散	t 値	自由度	p 値
1 回目	15	39.8	142	-3.35	14	0.0024
2 回目	15	46.5	32			

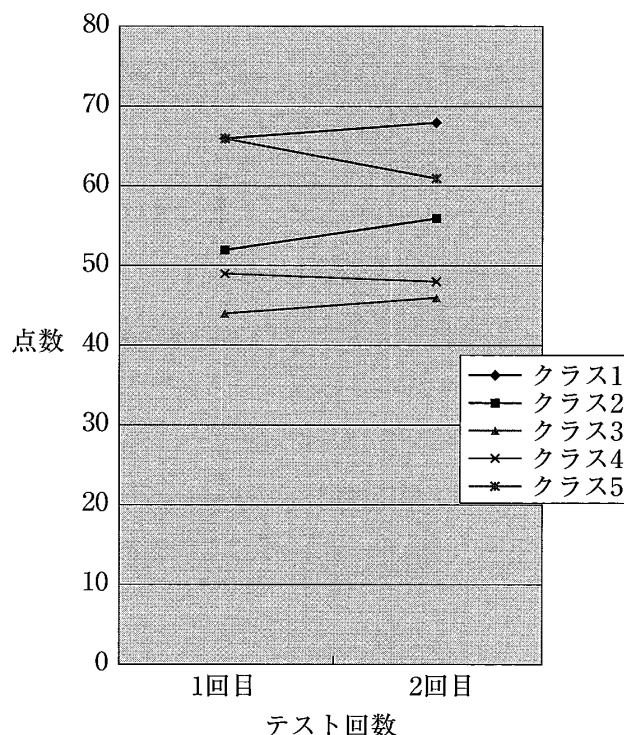
特に大幅な得点の向上が見られたクラス 3（+23.4点）とクラス 9（+19.5点）は、それぞれ人文学部全学科合同クラスのレベル 5 と家政学部服飾造形学科のレベル 3 のクラスであったのに対し、平均得点の向上が見られなかったクラス10（-6.4点）とクラス13（0点）は、それぞれ家政学部健康栄養学科と生活環境学科のレベル 1 であった。これらの結果から、CALL教材を使用した授業が比較的低いレベルの学習者のリスニング力の向上に効果的であって、高いレベルの学習者に向けての授業をどうするべきか、という今後の課題が明らかになった。

次に、CALL教材を取り入れたことが実際、得点の向上につながったか否かを調べるため、英語 b のCALL不使用クラスの学習者による事前テストと事後テストにおけるリスニングセクションの結果を比較した。英語 b CALL不使用全 5 ク

表3. 3 英語 b リスニングセクション平均点（CALL不使用）

クラス	1 回目	2 回目	得点の伸び
クラス 1	66	68	2
クラス 2	52	56	4
クラス 3	44	46	2
クラス 4	49	48	- 1
クラス 5	66	61	- 5
平 均	55	56	1

図3. 2 英語 b G-TELPリスニング平均点（CALL不使用）



ラスの平均得点を見ると(表3.3、図3.2参照)、得点差の平均値は+1点で、3クラスにおいて得点の向上が見られたが、残り2クラスでは得点が減少したことが明らかになった。

これらの得点差に関して対応のあるt検定を行ったところ(表3.4参照)、有意な得点の向上は認められなかった( $p=0.41$ 、 $p>0.05$ )。

表3.4 英語b G-TELPリスニング平均点(CALL不使用)

テスト回数	データ数	平均値	分散	t 値	自由度	p 値
1 回目	5	55	102	-0.26	4	0.41
2 回目	5	56	83			

これらの結果から、英語bのCALL不使用クラスの学習者にはリスニングの得点の有意な向上が見られなかった反面、CALL使用クラスの学習者には大幅な伸びがあったことが証明された。このことは、英語bでは、CALL教材を用いた授業が学習者のリスニング力の向上に効果的であったことを示している。但し、ここで考慮すべきことは、CALL使用クラスと不使用クラスの授業担当者が異なるという点である。授業担当者が異なることにより、授業内容や指導方法といった学習環境も異なってくる。そのため、リスニングの学習効果の差が必ずしもCALL教材の使用によるものではなく、CALL教材以外の様々な要因が関与していることを無視することはできないだろう。

#### 4. 調査結果(2): 英語a、b CALL使用クラスのトータル、各セクションの得点

英語a、bのCALL教材使用クラスに関して、事後テストにおけるトータル平均得点の伸びと各セクションの平均得点の伸びを調査した。事後テストの結果を事前テストの結果と比較すると(表4.1、図4.1参照)、トータルの得点に関して、平均値+6.4点の伸びが認められた。この得点差に対応のあるt検定を行ったところ(表4.2参照)、この得点の伸びが有意であることが証明された( $p=0.039$ 、 $p<0.05$ )。

事後テストのリスニングセクションの得点結果に関しては、先述の英語bのCALL使用クラスの分析結果とほぼ同一の結果となり、平均値+6.6点の伸びが認められた。対応のあるt検定により(表4.3参照)、この得点の伸びが有意であることが証明された( $p=0.0009$ 、 $p<0.05$ )。

この結果の要因としては、CALL使用全17クラス中、15クラスが英語bであり、英語bでは、アルク教材の中でも、特にリスニング教材を中心に使用していることが考えられる。

図4.1 英語 a、b G-TELP各セッション及びトータルの平均点（CALL使用）

表4.1 英語 a、b 各セッション及びトータル平均点（CALL使用）

	1 回目	2 回目	得点の伸び
グ ラ マ ー	62.5	56.2	-6.3
リ ス ニ ン グ	41.7	48.3	6.6
リーディング	45.8	51.9	6.1
TOTAL	150	156.4	6.4

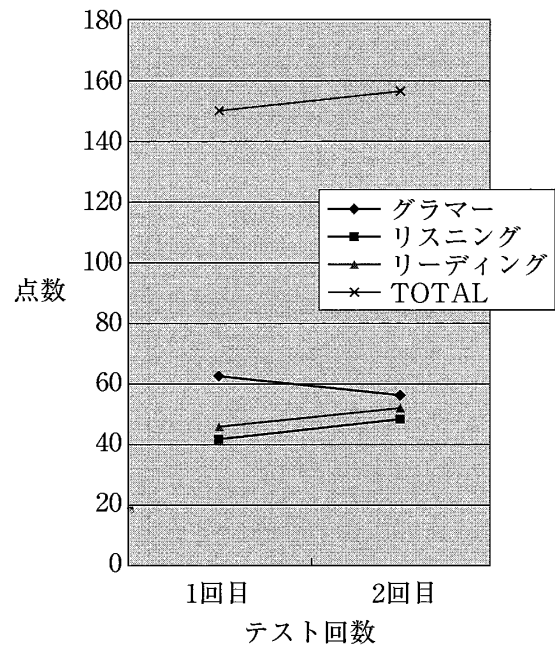


表4.2 英語 a、b G-TELPトータル平均点（CALL使用）

テスト回数	データ数	平均値	分散	t 値	自由度	p 値
1 回目	17	150	179	-1.89	16	0.039
2 回目	17	156.4	131			

表4.3 英語 a、b G-TELPリスニング平均点（CALL使用）

テスト回数	データ数	平均値	分散	t 値	自由度	p 値
1 回目	17	41.7	154	-3.73	16	0.0009
2 回目	17	48.3	56			

事後テストのリーディングセッションの結果に注目すると、事前テストの結果と比較して、平均値+6.1点の伸びが見られた。この得点の伸びは、対応のあるt検定により（表4.4 参照）、有意であることが証明された（ $p=0.0001$ 、 $p<0.05$ ）。

これは、アルク教材が、リスニング教材でも、単語の解説、単語帳の機能といった語彙力の強化や、全文英語表示による復習といったリーディング力の強化の訓練を助ける機能が備わっているためであろうと考えられる。英語bの受講者でも、聴き取りの学習をしながら、同時に読解の学習をすることが可能なアルク教材の特性が発揮された結果であろうと推察で

表4. 4 英語 a、b G-TELPリスニング平均点 (CALL使用)

テスト回数	データ数	平均値	分散	t 値	自由度	p 値
1 回目	17	45.8	220	-4.72	16	0.0001
2 回目	17	51.9	183			

きる。

グラマーセクションの得点に関しては、他のセクションと異なり、事前テストと比較して、事後テストの平均得点に大幅な減少が見られた。その内訳を見ると、英語 a、b CALL使用全17クラス中1クラスのみには+5.9点の伸びが認められたが、それ以外の16クラスの平均得点に減少が見られた。これらの要因の一つとして挙げられることは、事前テストと事後テストとの内容の違いである。両テストともに、G-TELPの同一レベルの問題が使用されたが、事前テストの内容を受験者が覚えている可能性を考慮して、異なる内容のテスト問題が採用された。両テストは同一レベルとなっても、グラマーセクションの難易度に大きな違いがあることが明らかになった。異なった点は、事前テストでは、2人称単数のYes/No疑問文が多く出題されたが、事後テストでは、3人称単数、複数のYes/No疑問文が多く出題された。明らかに後者の文法事項の方が日本人英語学習者にとって苦手とするものである。事前テスト、事後テストで用いられている問題が同一レベルとされているのは、G-TELPがアメリカで、主にESL学習者のために開発されたテストであり、日本人英語学習者のレベルを必ずしも反映していないと考えられる。この問題点は、平成18年度以降に採用するテスト問題を前もって入念にチェックするという今後の課題を示している。したがって、事前テストと事後テストのグラマーセクションでは、その問題内容という条件に差があった可能性があり、このことが事後テストにおける平均得点の低下につながった1つの要因である可能性が考えられる。

二つ目の要因としては、平成17年度に使用されたアルク教材『スタンダードコース』、『初級・中級コース』ともにリスニング力とリーディング力の強化に主眼を置いていて、文法強化に必ずしも直結していないということが考えられる。文法指導の有無やその程度は授業担当者に任されているため、全体として、文法指導の補足が足りなかった可能性が考えられる。但し、平成17年度の後期に、アルクの文法教材が本学にインストールされたため、平成18年度以降は、こういった問題点が解決される方向に向っていると思われる。



## 5. CALL使用クラスの学習者の反応

平成17年度にアルクCALL教材を使用した学生のうち418名に、授業方法に関して10問から成るアンケート調査を実施した。「はい」を5、「いいえ」を1にした5段階で評価してもらい、その調査結果をグラフに示した（図5. 1～5.10参照）。

これらのグラフから、学生のCALL教材を取り入れた授業に対する肯定的な意識が読み取

図5. 1 学生のCALL教材に対する評価（楽しく学習できた）

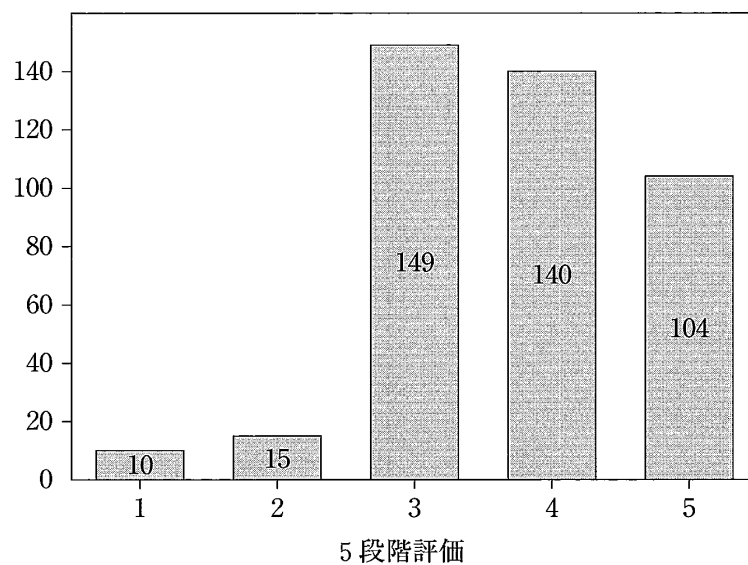
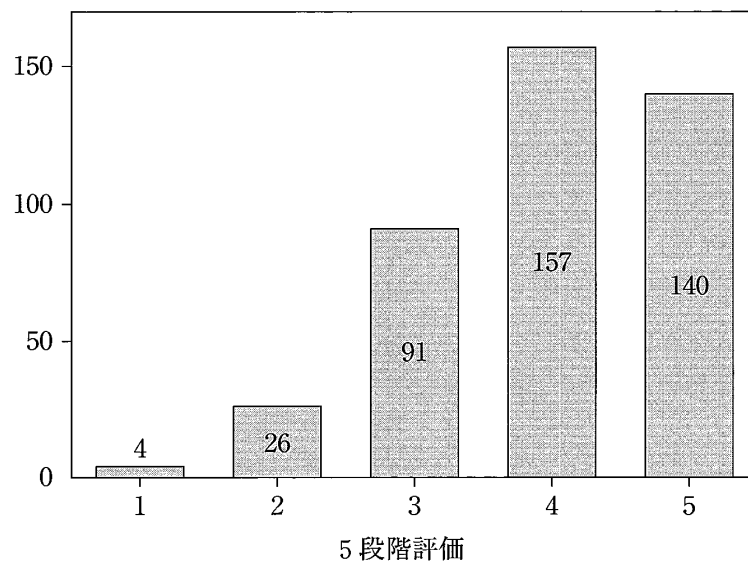


図5. 2 学生のCALL教材に対する評価（自分のペースで学習できた）



れる。高く評価されている項目としては、「自分のペースでできる」という自習教材の長所に関して、297人が「5、4」段階の評価をつけている。アルク教材の題材の多様性も評価されており、258人が「いろいろな題材、内容を学んだ」という項目に「5、4」段階の評価をしている。また、244人が「楽しく学習できた」、229人が授業を「授業をとってよかった」と回答している。これらの項目に関する高評価は、教材内容の充実、コンピューターを取り入れた授業方法からきているのではないかと考えられる。また、231人が「授業がため

図5.3 学生のCALL教材に対する評価（いろいろな題材、内容を学んだ）

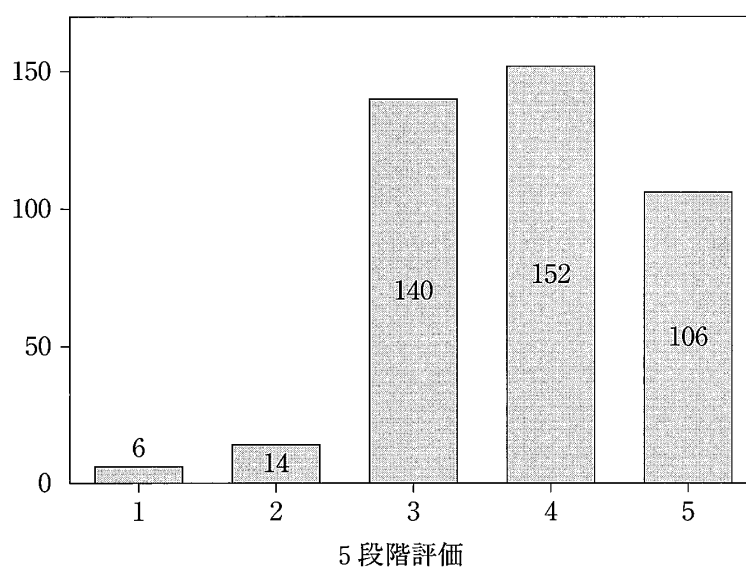
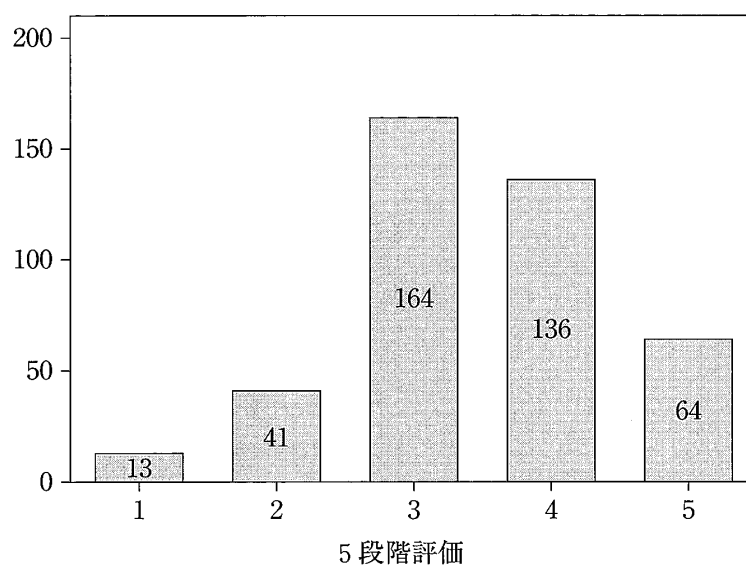


図5.4 学生のCALL教材に対する評価（難易度が自分に合っていた）



になった」と回答しており、これは、比較的短い教材を多くこなすことによる達成感によるのではないかと考えられる。授業の分かり易さに関しては205人が「分かり易かった」と回答しており、165人が「どちらでもない」と回答している。

一方、英語力の伸びに関する質問では、聴き取り力、読解力、語彙力のいずれの項目についても「どちらでもない」という回答が最も多く、それぞれ195人、193人が「3」をつけている。これは、授業が一年間という短い期間であって、学生の英語力の向上に対する自覚が

図5.5 学生のCALL教材に対する5段階評価（聴き取り、読み取りの向上）

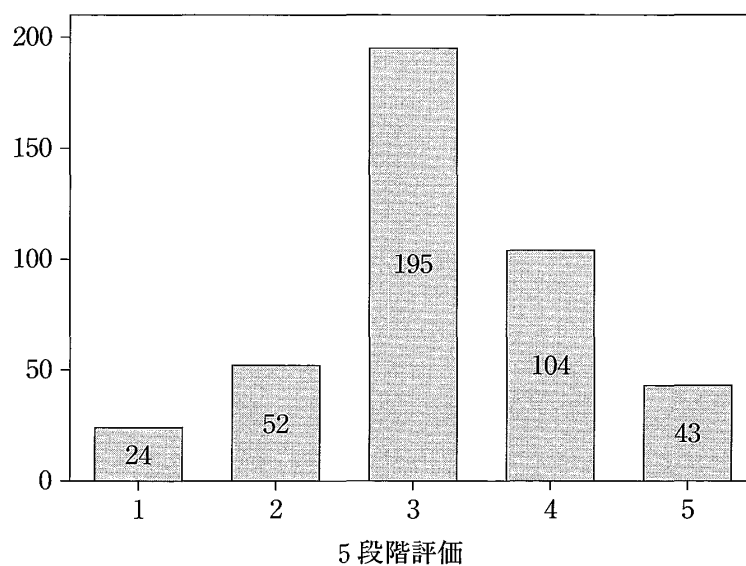
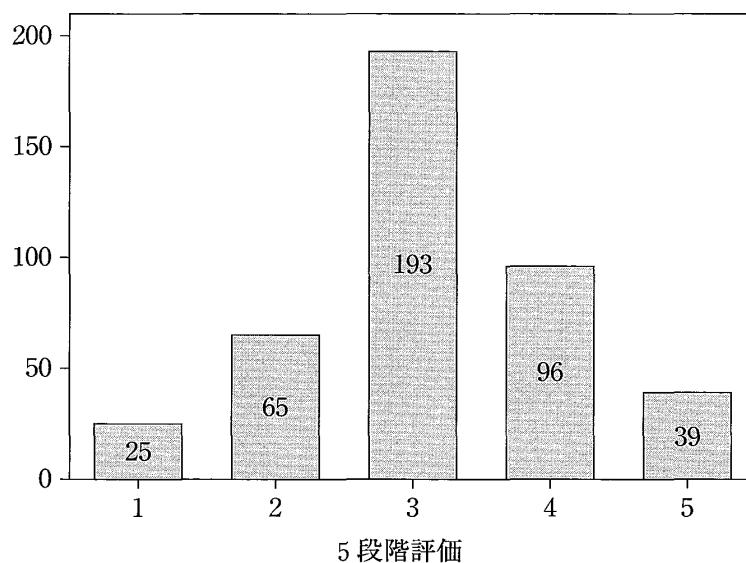


図5.6 学生のCALL教材に対する評価（語彙が増えた）



まだ見られないためであろうと推測できる。この英語力の伸びに対する学生の意識とも関連していると思われる、教材の難易度に関しては、164人が「どちらでもない」と回答していて、「難易度が自分に合っていなかった」と回答した学生が54人であった。このことから、本来、様々な難易度から成る教材から自分に合ったものを選んで学習する、という自習型CALL教材の特質が生かされていない、という問題点が浮かび上がった。一斉授業に取り入れながら、各自のレベルに合った教材を選択するという自習教材の長所を活かすことが今後

図5. 7 学生のCALL教材に対する評価（分かり易かった）

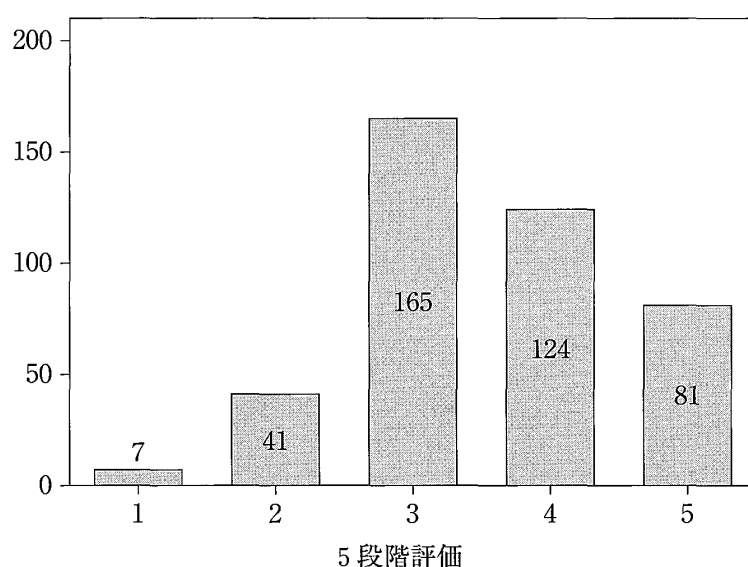


図5. 8 学生のCALL教材に対する評価（ためになった）

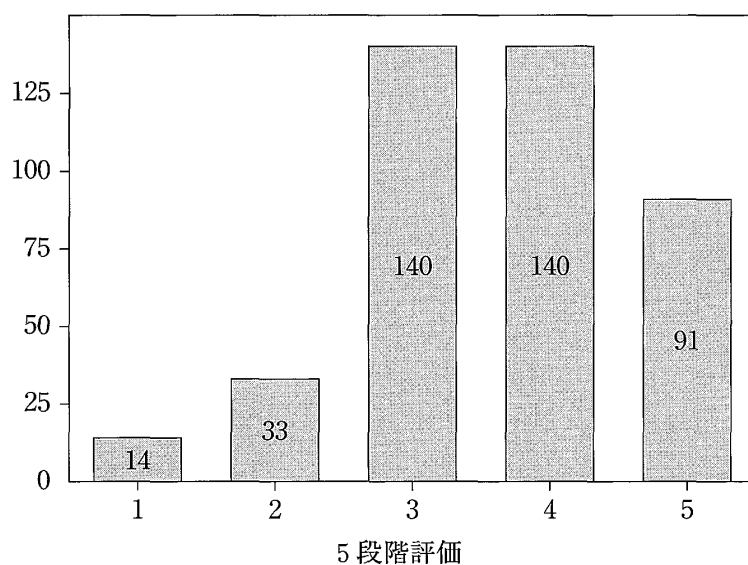


図5.9 学生のCALL教材に対する評価（授業をとってよかった）

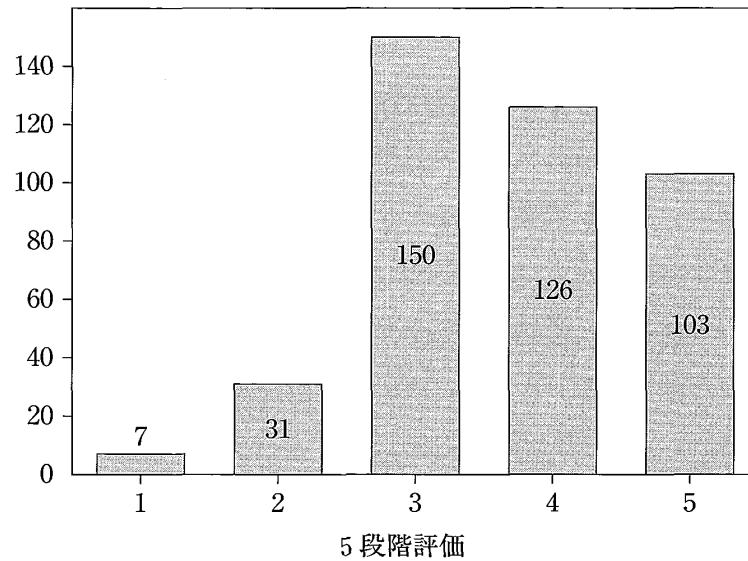
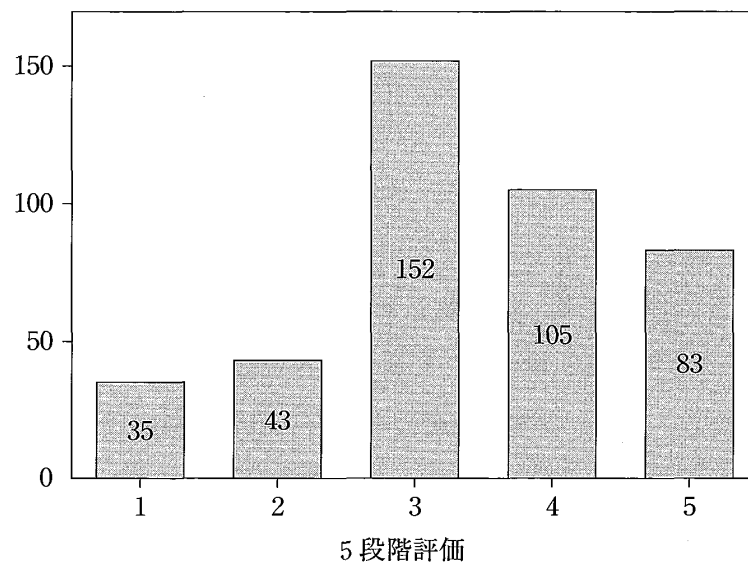


図5.10 学生のCALL教材に対する評価（2年生以降のCALL授業を希望する）



の課題であろう。

## 6. 今後の課題

CALL教材を導入した英語授業による教育効果については、事前テストと事後テスト間に有意な点差が認められたことから、学生の英語におけるリスニング力、リーディング力を向

上させたことが明らかになった。一方、グラマーに関しては、17クラスのうち16クラスで低下したことが明らかになった。このことから、リスニング力とリーディング力の向上を狙ったアルク教材の『スタンダードコース』、『初級・中級コース』を使用する場合、教材に合わせて、授業担当者による文法指導の補足、実践が不可欠であることが明らかになった。また、平成17年度後期に、アルク教材のグラマー教材がインストールされ、平成18年度からは授業中にアルク教材を使って文法を指導することが可能となると考えられる。

アンケートによる学習者のCALL教材利用授業に対する意識調査を実施したところ、教材や授業内容に対する学習者の反応は肯定的なものが多かった。但し、多くの学生が教材の難易度が適当でなかったと答えており、各自のレベルに合った教材を選択して学習するという本来自習教材であるCALL教材の特徴が活かされていないという問題点が浮かび上がった。CALL教材を使って学習する場合、学生がサーバから送出された教材に一人で取り組むことになるため、結果として学習者間で意欲や成果に関して大きな差が出てしまうという事例も報告されている<sup>4</sup>。この点を補うために、一斉授業的要素と自学自習要素のバランスを保ち、補助教材や復習テストを用意したり、学生の予習、復習を習慣づけるよう、授業担当者による動機付けが必要であると考えられる。

その他の課題としては、高いレベルのクラスの授業をどうするべきか、という点が挙げられる。事後テストのリスニングセクションで平均点の向上が見られなかったクラスは両者ともレベル1であった。実力の高い学習者は、創造的な側面の少ないCALL教材による自習に物足りなさを感じ、飽き易いという傾向が強い、と言われている<sup>5</sup>。インターネット上のホームページや、ニュース記事、問題集など、より時代の流れに密着した素材を既存のCALL教材と併用することも解決策の一つであろうと考えられる。また、日々開発されている、高い能力を備えたソフトの研究も必要であろう。外国語教育研究センターでは、PC@LL教材作成ツールを利用するなどして、アルク教材と密着性の高いものから全く別のものまで、独自のCALL教材用の素材を作成し、教員用共有フォルダに用意して、全ての教員がいつでも自由に使用できるようにしている。しかし、市販のCALL教材にその内容、機能が及ぶわけではなく、ある程度、市販ソフトに授業を任せることにより、教師は、より高いレベルの教育を提供することが可能になるだろうと考えられる。

また、できるだけ多くの英語授業担当者がCALL利用の運営に慣れて、その特徴を理解するために、情報メディアセンターと連携してオリエンテーションを頻繁に設けたり、勉強会のようなものを設け、教員同士、授業方法に関する意見交換を行えば、CALLを利用した教育方法のより高度な改善につながるだろう。実際、平成18年度前期で、アルク教材の文法

コースを授業に取り入れている教員は限られていて、多くの英語授業担当者は、その存在すら知らないというのが実情である。オリエンテーションや研究会が啓蒙的な役割を果たすことで、より充実した、円滑な授業の実現が可能となるだろう。

こうした問題点を克服する別の方法として、TAの採用ということが挙げられるだろう。本学では、平成18年度よりTA制を開始したが、現在、CALLを使用した英語授業では採用されていない。特に学習意欲の低い学生や、学習レベルの低い学生にはTAを活用したリメディアル教育を実現することが不可欠だと思われる。また、受講者全員がPCの操作に慣れているわけではなく、授業中に個々の学生のPC操作上のトラブルが目立った。授業の進行上、全ての問題を授業担当者が対処するのは困難であるため、ある程度PCの知識を持ったTAを採用することにより、より円滑な授業が実現すると考えられる。

## 7. むすび

本研究では、平成17年度にCALL教材を利用して英語授業を行った17クラスの教育効果と学習者の反応から明らかになった課題を検討した。教育効果については、標準テストの総合得点を有意に向上させたことが明らかになった。特に、リスニング力とリーディング力の向上が見られたが、文法セクションでは得点の向上は見られなかった。CALL教材を利用した授業に対する学習者の反応は肯定的なものが多かったが、教材の難易度に関しては否定的な評価が見られた。こういった問題点をどう解消していくかが今後の課題として浮かび上った。

外国語教育研究センターでは、語学教育の効果を促進するために様々な試みを行っているが、その一環として、平成18年度から1年生の共通教養の英語aと英語bに45分授業 Semester制を設け、英語aをネイティブスピーカーによるスピーキングと日本人教員によるライティング、英語bを日本人教員によるリスニングとリーディングというように4つの授業に細分化した。新制度の導入により、授業で教えるべきスキルが明確化され、学生の英語力の向上が期待されることとなった。その反面、45分という短時間の授業にCALL教材を取り入れた場合の時間配分や教員の役割という新たな問題も生まれてきている。今後次々と生じるであろう課題を解決していき、CALL教材の英語教育におけるより有効なあり方を探っていくためには、教員が時間と労力を費やし、絶えずより良い授業を提供する努力をしていかななくてはならないが、それ以外に、全学レベルの支援による組織的体系的体制の確立が不可欠であると考えられる<sup>6</sup>。

## 参考文献および関連URL

- (1) 奥聡、河合靖、久保美織、栗原豪彦、鈴木志のぶ、野坂政司（共著）「自習型CALL教材を用いた外国語教育の可能性」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—Ⅱ』pp. 85-92、2003。
- (2) 小口一郎「CALLと英語教育—言語文化部英語教室の取り組み」『サイバーメディア・フォーラム No.4』9月号、pp. 36-39、2003。
- (3) 吉田文美「CALL学習に対する学習者個人特性の分析」『名古屋大学大学院日本言語文化研究誌：言語と文化 No.4』pp. 145-160、2003。
- (4) 劉百齡「CALLおよびマルチメディアLL教室を使用した外国語授業の展開—外国語教育FD研究会の報告を兼ねて—」『徳島大学教育研究ジャーナル 第2号』pp. 92-99、2005。

## 注

- 1 平成18年度から新カリキュラムに変更された。
- 2 G-TELPはGeneral Tests of English Language Proficiency（英語運用能力総合判断テスト）の略語。ロバート・ラド博士（元ジョージタウン大学言語学部長）とフランシス・ヒノフォティス博士（サンディエゴ州立大学）を中心とするチームによって開発され、後に、SDSU（サンディエゴ州立大学）のITSC（International Testing Services Center）の主管で18か月の時間をかけて開発されたテストである。開発コンセプトは「ネイティブスピーカーでない人が、実際的な状況下で、どの程度英語をコミュニケーション手段として駆使する能力を有しているかを測定する」（G-TELP Information Bulletinより）というものである。
- 3 調査対象の授業で使用するコースは担当教員の判断に委ねられた。
- 4 小口一郎「CALLと英語教育—言語文化部英語教室の取り組み」『サイバーメディア・フォーラム No.4』9月号、pp. 36-39、2003。
- 5 奥聡、河合靖、久保美織、栗原豪彦、鈴木志のぶ、野坂政司（共著）「自習型CALL教材を用いた外国語教育の可能性」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—Ⅱ』pp. 85-92、2003。
- 6 本稿は平成17年度私立大学教育高度化推進と区別補助、英語教育の改善による成果である。

（人文学部外国語教育研究センター講師）